

第30回 令和7年5月28日（水）

## 「他者にもレベルがあります。」

嫌な言い方に聞こえてしまうかもしれません、基本的に「他者」とわかりあえることはありません。これは協調性ではなくて、あくまで意識レベルの話。

好きな芸能人とか、芸術についての評価とか、価値観などは例え双子であっても完全に一致することはありません。だからSNSなどで他人の評価を批判することは結局どこまでも並行し、衝突することが多いのです。

だから人間はある程度のところで「これは他人の考えだから」と妥協して納得します。自分の趣味ではないことに夢中になる人がいても「それいいね」と答える社会性があります。

フランスの哲学者レヴィネスさんも「他者とはわかりえないもの」と断定しています。それでもここで覚えておいてほしいことは「わかりえないからこそ学ぶことも多い」ということです。

それが自分にとって新しい発見であれ、どうしても納得できない反面教師の要素であれ、そこから気づかされることは意外とあります。意見が合わない人を遠ざけていると自然と自分の成長は止まってしまいます。SNSは同じ意見が集まるシステムであり、これを長く使っていると人としての視野は狭くなっています。みんな自分と同じ意見だという勘違いに陥ります。

また他者にもレベルがあるというのは「顔」が見えているかどうか。養老先生は「死の壁」の中で、ニュースの何名死亡という「死」と、顔のわかっている人の「死」はレベルが違うということを語っています。

SNSの意見はまさに顔の見えない意見です。「なるほど」と思うことも多いかもしれません。顔の見えない他者は関係性のレベルが低いので、影響力も少なくなります。

本当にその人から何かを学びたいと思えばやはり顔が見えることが大事です。

いま生きていない過去の人、過去の哲学者や芸術家などは本や作品に自分の主張を強く残している場合があります。（もちろんそれが伝わらない本もたくさんあります。）

直接顔を見ることはできないけど、それ以上のインパクトで語りかけてくれることもあります。

若いころ、修学旅行の下見で沖縄のガマに入らなければいけない機会がありました。まだ整備されていないところ、ガイドなしで真っ暗な洞窟に入って懐中電灯を消した時、顔が見えない他者の思いが伝わった気がしました。怖かっただろうな、二度と戦争はしてはいけないと思いました。

実際に見ることで感じ方が違うということはたくさんあります。戦跡に行って戦死者数の記録ではなく、亡くなった方の「顔」を思うことも大事だと感じました。